

◎指示があるまで開かないこと。

(平成30年2月10日 16時10分～18時30分)

注意事項

1. 試験問題の数は66問で解答時間は正味2時間20分である。
2. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) (例1)、(例2)の問題ではaからeまでの5つの選択肢があるので、そのうち質問に適した選択肢を(例1)では1つ、(例2)では2つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例1)の質問には2つ以上解答した場合は誤りとする。(例2)の質問には1つ又は3つ以上解答した場合は誤りとする。

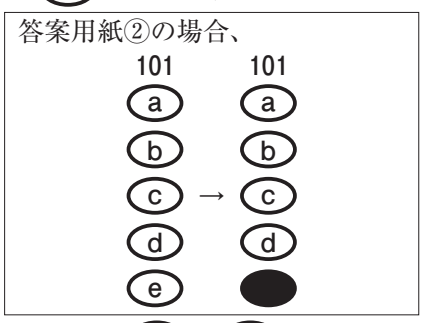
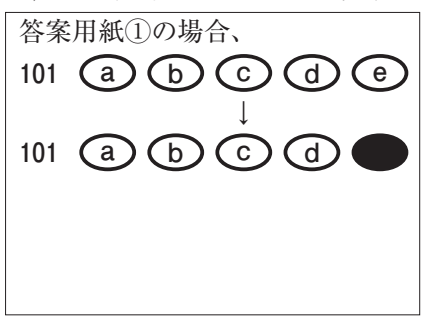
(例1) 101 医業が行えるのはどれか。

- a 合格発表日以降
- b 合格証書受領日以降
- c 免許申請日以降
- d 臨床研修開始日以降
- e 医籍登録日以降

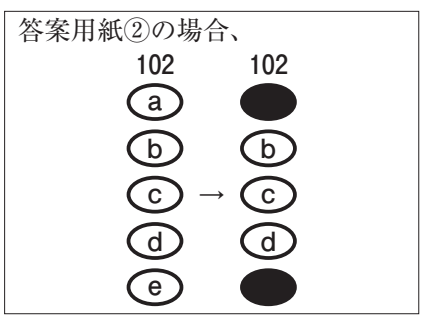
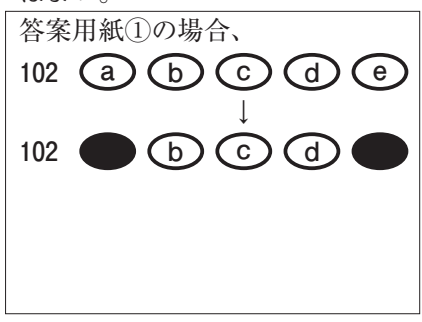
(例2) 102 医籍訂正の申請が必要なものはどれか。2つ選べ。

- a 氏名変更時
- b 住所地変更時
- c 勤務先変更時
- d 診療所開設時
- e 本籍地都道府県変更時

(例1)の正解は「e」であるから答案用紙の(e)をマークすればよい。



(例2)の正解は「a」と「e」であるから答案用紙の(a)と(e)をマークすればよい。



(2) (例3)では質問に適した選択肢を3つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例3)の質問には2つ以下又は4つ以上解答した場合は誤りとする。

(例3) 103 医師法に規定されているのはどれか。3つ選べ。

- a 医師の行政処分
- b 広告可能な診療科
- c 不正受験者の措置
- d 保健指導を行う義務
- e へき地で勤務する義務

(例3)の正解は「a」と「c」と「d」であるから答案用紙の (a) と (c) と (d) をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

103	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
103	●	(b)	●	●	(e)

↓

答案用紙②の場合、

103	(a)	●
	(b)	(b)
	(c)	→ ●
	(d)	●
	(e)	(e)

- (3) 計算問題については、に囲まれた丸数字に入る適切な数値をそれぞれ1つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例4)の質問には丸数字1つにつき2つ以上解答した場合は誤りとする。

(例4) 104 68歳の女性。健康診断の結果を示す。

身長 150 cm、体重 76.5 kg (1 か月前は 75 kg)、腹囲 85 cm。体脂肪率 35 %。

この患者のBMI (Body Mass Index) を求めよ。

ただし、小数点以下の数値が得られた場合には、小数第1位を四捨五入すること。

解答：① ②

(例4)の正解は「34」であるから①は答案用紙の③を②は④をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

104	①	0	1	2	●	4	5	6	7	8	9
	②	0	1	2	3	●	5	6	7	8	9

答案用紙②の場合、

	①	②
104	0	0
	1	1
	2	2
	●	3
	4	●
	5	5
	6	6
	7	7
	8	8
	9	9

1 アルコールによる手指衛生の効果が高いのはどれか。

- a 破傷風菌
- b ノロウイルス
- c ロタウイルス
- d ボツリヌス菌
- e インフルエンザウイルス

2 WHOの活動について正しいのはどれか。

- a 識字率を向上させる。
- b たばこ規制を推進する。
- c 食糧を安定的に供給する。
- d 温室効果ガスの削減を行う。
- e 労働者の作業環境を改善させる。

3 吸収不良症候群の症状として頻度の低いのはどれか。

- a 貧血
- b 浮腫
- c 便秘
- d 体重減少
- e 腹部膨満感

4 末梢静脈路から 1 L の維持輸液製剤 (電解質組成 : Na^+ 35 mEq/L、 K^+ 20 mEq/L、 Cl^- 35 mEq/L) を投与する際、この製剤に追加できるカリウムの最大量 (mEq) はどれか。

- a 2
- b 4
- c 20
- d 40
- e 200

5 圧力波による一次爆傷を受けにくいのはどれか。

- a 眼 球
- b 鼓 膜
- c 肺
- d 胸 椎
- e 消化管

6 女子の二次性徴のうち最も遅れてみられるのはどれか。

- a 初 経
- b 子宮発育
- c 恥毛発生
- d 乳房発育
- e 全身の骨端線閉鎖

7 冠動脈の造影 3D-CT(別冊No. 1 ①～⑤)を別に示す。

左冠動脈回旋枝はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤



8 訪問看護サービスに含まれないのはどれか。

- a 服薬指導
- b 歩行訓練
- c 室内清掃
- d 食事の援助
- e 人工呼吸器の管理

9 妊娠中にワクチンが接種可能なのはどれか。

- a 風 疹
- b 麻 疹
- c 水 痘
- d 流行性耳下腺炎
- e インフルエンザ

- 10 市町村保健センターの業務はどれか。
- a 医療計画の策定
 - b 健康教室の開催
 - c 人口動態統計の作成
 - d 食中毒発生時の原因調査
 - e 医療安全管理に関する指導
- 11 胃粘膜下腫瘍の診断に有用なのはどれか。
- a 拡大内視鏡
 - b 色素内視鏡
 - c 超音波内視鏡
 - d カプセル内視鏡
 - e ダブルバルーン内視鏡
- 12 心神喪失の状態です殺人未遂を犯し、不起訴処分になった者の指定入院医療機関について定めた法律はどれか。
- a 刑法
 - b 医師法
 - c 医療観察法
 - d 地域保健法
 - e 精神保健福祉法

- 13 疾患と用いられる治療との組合せで誤っているのはどれか。
- a 洞性頻脈 ————— カテーテルアブレーション
 - b 急性冠症候群 ————— 経皮的冠動脈インターベンション
 - c 頸動脈狭窄症 ————— ステント留置術
 - d 腹部大動脈瘤 ————— ステントグラフト留置術
 - e 閉塞性動脈硬化症 ————— ステント留置術
- 14 正常胎芽・胎児において心拍数が最も多い時期はどれか。
- a 妊娠 6 週
 - b 妊娠 9 週
 - c 妊娠 16 週
 - d 妊娠 28 週
 - e 妊娠 40 週
- 15 二次医療圏について正しいのはどれか。
- a 都道府県が定める。
 - b 特定機能病院を設置する。
 - c ドクターヘリを配備する。
 - d 地域保健法によって規定される。
 - e 人口 30 万人を基準として設定される。

- 16 深部静脈血栓症の発症リスクとなるのはどれか。2つ選べ。
- a アンチトロンビン欠乏症
 - b 第Ⅷ因子欠損症
 - c フィブリノゲン欠乏症
 - d プラスミノゲン活性化抑制因子1欠損症
 - e プロテインS欠乏症
- 17 ショックをきたす病態で早期から中心静脈圧が上昇するのはどれか。2つ選べ。
- a 敗血症
 - b 緊張性気胸
 - c 異所性妊娠破裂
 - d 心タンポナーデ
 - e アナフィラキシー
- 18 労働衛生管理のうち作業環境管理はどれか。2つ選べ。
- a 労働時間の短縮
 - b 防毒マスクの着用
 - c 局所排気装置の設置
 - d 特殊健康診断の実施
 - e 気中有害物質濃度の測定

19 胆道疾患と治療の組合せで正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 急性胆管炎 ————— 内視鏡的胆道ドレナージ
- b 急性胆嚢炎 ————— 腹腔鏡下胆嚢摘出術
- c 肝門部胆管癌 ————— 経皮的胆嚢ドレナージ
- d 胆嚢腺筋腫症 ————— 内視鏡的十二指腸乳頭切開術
- e 先天性胆道拡張症 ————— 経皮的胆道ドレナージ

20 35歳未満の女性と比較して35歳以上の女性の妊娠で低率なのはどれか。2つ選べ。

- a 帝王切開実施率
- b 妊娠糖尿病の罹患率
- c 児の染色体異常発生率
- d 妊娠成立後の生児獲得率
- e 体外受精-胚移植を行った場合の妊娠率

21 尿路および男性生殖器の解剖について正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 精管は鼠径管を通過する。
- b 尿道は陰茎の腹側を走行する。
- c 尿管口は膀胱頂部にみられる。
- d 尿管は総腸骨静脈の背側を走行する。
- e 上膀胱動脈は外腸骨動脈から分枝する。

22 我が国において主要な曝露源が魚介類摂取であるのはどれか。2つ選べ。

- a 鉛
- b メチル水銀
- c カドミウム
- d ダイオキシン類
- e ビスフェノール A

23 介護保険における要介護認定に必要なのはどれか。2つ選べ。

- a 訪問調査
- b 主治医意見書
- c 保健所長の許可
- d 年金手帳
- e ケアプランの作成

24 高血圧と糖代謝異常をきたす疾患はどれか。3つ選べ。

- a 肝硬変
- b 先端巨大症
- c Cushing 症候群
- d 偽性 Bartter 症候群
- e 偽性アルドステロン症

25 32歳の女性。痒みを伴う皮疹を主訴に来院した。昨日夕食後に皮疹が背部に出現し、消退した後に下肢に同様の皮疹が出現した。下肢の写真(別冊No. 2)を別に示す。

この皮疹の種類はどれか。

- a 丘疹
- b 局面
- c 紅斑
- d 水疱
- e 膨疹

別冊

No. 2

26 日齢 21 の新生児。母子手帳の便色カードを見て、便の色が薄いことに気付いた母親に連れられて来院した。在胎 39 週、出生体重 2,800 g で出生し、出生時に異常は指摘されなかった。完全母乳栄養である。体重 3,200 g。体温 37.0℃。心拍数 110/分、整。血圧 80/40 mmHg。呼吸数 32/分。SpO₂ 98 % (room air)。四肢を活発に動かしている。皮膚および眼球結膜に黄染を認める。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は軽度膨満しており、肝を肋骨弓下に 3 cm 触知する。腸雑音の亢進はない。患児の便の写真(別冊No. 3)を別に示す。

母親への説明で適切なのはどれか。

- a 「母乳をやめましょう」
- b 「すぐに血液検査をしましょう」
- c 「1 週間後に便を持参してください」
- d 「便の細菌を調べる必要があります」
- e 「この便の色であれば再受診の必要はありません」

別 冊

No. 3

27 68歳の女性。左下腿の腫脹を主訴に来院した。3日前に転倒し左下腿を打撲した。徐々に腫脹が強くなり、心配になって受診した。脂質異常症、高血圧症、糖尿病および心房細動で内服治療中である。現在服用中の薬剤は、スタチン、カルシウム拮抗薬、アンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬、ビグアナイド薬およびワルファリンである。左下腿後面の写真(別冊No. 4)を別に示す。

この病変に関係しているのはどれか。

- a スタチン
- b ワルファリン
- c ビグアナイド薬
- d カルシウム拮抗薬
- e アンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬

別冊

No. 4

28 70歳の女性。腰痛を主訴に来院した。2日前に屋内で段差につまずいて転倒した後から腰痛が出現した。歩行は可能である。下位腰椎に強い叩打痛がある。腰椎エックス線写真で第3腰椎の圧迫骨折を認める。

この患者の今後の生活に対する指導をする際に考慮する必要性が低いのはどれか。

- a ロコモティブシンドローム
- b むずむず脚症候群
- c サルコペニア
- d 廃用症候群
- e フレイル

29 救急外来で小児を診察した研修医から指導医への報告を次に示す。

研修医 「3歳の男の子です。本日18時に突然腹痛が出現したため来院しました。痛みの部位ははっきりしません。全身状態は良好で嘔吐や発熱はなく、身体所見では腹部膨満があります。腸雑音は異常ありませんでした。鑑別のため腹部エックス線撮影、腹部超音波検査、血液検査を行いたいと思います」

指導医 「排便の状況はどうか」

研修医 「排便は3日間ないそうです」

指導医 「腹部の圧痛や反跳痛はありますか」

研修医 「どちらもありませんでした」

指導医 「検査より先に行う処置は何かありますか」

研修医 「(ア)が良いと思います」

指導医 「そうですね。では一緒に診察に行きましょう」

研修医の正しい判断として(ア)にあてはまるのはどれか。

- a 浣腸
- b 経鼻胃管の挿入
- c 経静脈的な補液
- d ペンタゾシンの投与
- e 酸化マグネシウムの投与

30 78歳の女性。夕食後に腹痛が出現し、次第に増強したため救急車で搬入された。43歳時に卵巣嚢腫摘出術を受けている。体温 38.0℃。心拍数 120/分、整。血圧 116/66 mmHg。SpO₂ 98% (鼻カニューラ 1 L/分 酸素投与下)。腹部は膨隆し、下腹部に圧痛と筋性防御とを認めた。腹部造影 CT で絞扼性イレウス及び汎発性腹膜炎と診断され、緊急手術を行うことになった。手術室入室時、体温 38.0℃。心拍数 124/分、整。血圧 90/54 mmHg。SpO₂ 100% (マスク 6 L/分 酸素投与下)。麻酔導入は、酸素マスクによって十分な酸素化を行いつつ、静脈麻酔薬と筋弛緩薬とを投与後、陽圧換気を行わずに輪状軟骨圧迫を併用し迅速に気管挿管を行う迅速導入とした。

下線に示すような麻酔導入を行う目的はどれか。

- a 誤嚥の防止
- b 気胸の予防
- c 舌根沈下の予防
- d 声帯損傷の回避
- e 食道への誤挿管の回避

31 75歳の男性。3か月前から徐々に左眼の視力低下をきたし、中心暗点も自覚するようになったため来院した。視力は右0.1(1.0×-1.5D)、左0.1(0.2×-2.0D)。左眼の眼底写真(別冊No. 5A)と光干渉断層計(OCT)像(別冊No. 5B)とを別に示す。

この疾患のリスクファクターはどれか。

- a 喫煙
- b 紫外線
- c 糖尿病
- d 緑内障手術既往
- e 大量アルコール摂取

別冊 No. 5 A、B

32 75歳の男性。労作時の呼吸困難と体重減少とを主訴に来院した。5年前から労作時の呼吸困難を自覚していたが徐々に増強し、体重も半年前と比較して8kg減少したため心配になり来院した。7年前に肺炎で入院治療を受けている。喫煙は30本/日を50年間。意識は清明。身長162cm、体重39kg。体温36.5℃。脈拍96/分、整。血圧140/70mmHg。呼吸数24/分。SpO₂91%(room air)。心音はI音とII音の減弱を認めるが心雑音は認めない。呼吸音は減弱している。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球435万、Hb13.7g/dL、Ht41%、白血球7,200、血小板19万。血液生化学所見：総蛋白6.4g/dL、アルブミン3.4g/dL。CRP0.4mg/dL。動脈血ガス分析(room air)：pH7.42、PaCO₂47Torr、PaO₂62Torr、HCO₃⁻28mEq/L。呼吸機能所見：%VC78%、FEV₁%42%。胸部エックス線写真(別冊No. 6A)と胸部CT(別冊No. 6B)とを別に示す。

この疾患について誤っているのはどれか。

- a 除脂肪体重は予後と関連する。
- b 高蛋白・高エネルギー食が望ましい。
- c 脂質の割合が高い栄養素配分が基本である。
- d 安静時エネルギー消費量は予測値より低下する。
- e 食事に伴う呼吸困難が食事摂取量減少の一因となる。

別冊

No. 6 A、B

33 生後2時間の新生児。在胎40週0日、出生体重2,000g、Apgarスコア8点(1分)、8点(5分)で出生した。生後2時間で四肢を小刻みに震わせることが頻回にあった。体温36.5℃。心拍数120/分、整。呼吸数40/分。下肢のSpO₂98%(room air)。大泉門は平坦。心雑音を聴取せず、呼吸音に異常を認めない。筋緊張は正常で、Moro反射と吸啜反射とを正常に認める。出生後は排尿を認めていない。

直ちに行うべき検査はどれか。

- a 血糖測定
- b 心エコー検査
- c 血液ガス分析
- d 血清ビリルビン測定
- e 胸腹部エックス線撮影

34 62歳の男性。左視床出血で入院中である。6週間前に右上下肢の脱力感のために来院し、左視床出血と診断され入院した。入院後の経過は良好で、退院に向けたリハビリテーションを行っている。意識は清明。身長172cm、体重71kg。血圧118/78mmHg。呼吸数16/分。SpO₂97%(room air)。徒手筋力テストで右上肢筋力は4、右下肢筋力は腸腰筋4、大腿四頭筋4、前脛骨筋2。右半身の表在感覚は脱失し、位置覚は重度低下している。食事は左手を使って自立しており、立ち上がりもベッド柵を使用して可能である。患者は事務職への早期復職を希望しているが、通勤には電車の利用が必要である。

退院に向けたリハビリテーションの目標として適切なものはどれか。

- a キーボードを見ずに右手でパソコン入力を行う。
- b 閉眼したまま右下肢で片足立ちを保持する。
- c 長下肢装具を用いた移乗動作を行う。
- d 介助を受けてズボンの上げ下ろしを行う。
- e 短下肢装具とT字杖とを用いて歩行する。

35 82歳の女性。悪心と骨盤の痛みとを主訴に来院した。2年前に骨病変を伴う多発性骨髄腫と診断された。抗癌化学療法とビスホスホネート製剤の投与とを受けていたが治療抵抗性となり、3か月前に抗癌化学療法は中止した。その後、多発性骨髄腫による骨盤の痛みが生じたため、局所放射線照射を行ったが除痛効果は一時的であり、モルヒネの内服を開始した。当初、痛みは良好にコントロールされていたが、徐々にモルヒネの効果が乏しくなったため、段階的に増量した。数日前から痛みに加え、食欲不振と悪心が強くなり受診した。血液検査で電解質に異常を認めない。腹部エックス線写真でイレウス所見を認めない。

対応として適切なのはどれか。

- a モルヒネを増量する。
- b 抗癌化学療法を再開する。
- c モルヒネをアスピリンに変更する。
- d ビスホスホネート製剤を増量する。
- e モルヒネを他のオピオイドに変更する。

36 44歳の男性。消化管検査のため1日絶食が必要になり、末梢静脈から1,500 mL/日の輸液を行うことになった。耐糖能異常と電解質異常はない。身長167 cm、体重61 kg。Na⁺は成人推奨量を、K⁺は平均的な経口摂取量の半分程度を入れた。アミノ酸や脂肪乳剤の投与は行わない。輸液の既製市販品の組成を示す。

輸液の名称	Na ⁺ (mEq/L)	K ⁺ (mEq/L)	ブドウ糖(g/dL)
A液	30	20	20
B液	84	20	3.2
C液	35	20	4.3

1日分の輸液として適切なのはどれか。

- a A液 1,500 mL
- b B液 1,500 mL
- c C液 1,500 mL
- d 乳酸リンゲル液 1,500 mL
- e 5%ブドウ糖液 500 mL と生理食塩液 1,000 mL

37 1歳3か月の女児。長引く咳嗽と鼻汁とを主訴に母親に連れられて来院した。1週間前に39℃台の発熱、鼻汁および咳嗽が出現し、かかりつけ医でセフェム系抗菌薬と鎮咳薬とを処方され、2日後に解熱した。その後も内服を続けているが、鼻汁と痰がらみの咳が続いている。鼻閉のために時に息苦しそうな呼吸になるが、夜間の睡眠は良好である。食欲は普段と変わらず、活気も良好でよく遊ぶ。呼吸器疾患の既往はない。身長75 cm、体重10.2 kg。体温37.1℃。脈拍112/分、整。呼吸数30/分。SpO₂ 98% (room air)。咽頭に発赤と白苔とを認めない。心音に異常を認めない。鼻閉音を認めるが、呼吸音には異常を認めない。

患児に対する対応として適切なのはどれか。

- a 抗菌薬をマクロライド系抗菌薬に変更
- b ロイコトリエン受容体拮抗薬の追加
- c 内服薬を中止し経過観察
- d 抗ヒスタミン薬の追加
- e β_2 刺激薬の吸入

38 59歳の男性。労作時の呼吸困難を主訴に来院した。3年前から労作時の呼吸困難があったがそのままにしていた。健診で胸部の異常陰影を指摘されたため、心配になり受診した。身長172 cm、体重70 kg。体温36.3℃。脈拍80/分、整。血圧128/84 mmHg。呼吸数18/分。SpO₂ 95% (room air)。心音に異常を認めない。呼吸音は正常だが、両側の背部に fine crackles を聴取する。胸部エックス線写真(別冊No. 7A)と胸部CT(別冊No. 7B)とを別に示す。

別に示す flow-volume 曲線(別冊No. 7C①~⑤)のうち、この患者で予想されるのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

別冊 No. 7 A、B、C①~⑤

39 70歳の女性。数か月前から食後に心窩部痛があるため来院した。体温 37.1℃。血圧 124/62 mmHg。眼球結膜に黄染を認める。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球 432 万、白血球 7,600、血小板 26 万。血液生化学所見：総ビリルビン 7.9 mg/dL、直接ビリルビン 5.2 mg/dL、AST 271 U/L、ALT 283 U/L、ALP 2,118 U/L (基準 115~359)、 γ -GTP 605 U/L (基準 8~50)、アミラーゼ 42 U/L (基準 37~160)。CRP 6.1 mg/dL。ERCP(別冊No. 8)を別に示す。

最も可能性が高いのはどれか。

- a 原発性胆汁性胆管炎
- b Mirizzi 症候群
- c 総胆管結石
- d 肝細胞癌
- e 胆管癌

別 冊

No. 8

40 生後8か月の乳児。ぐったりしていると、母親に抱きかかえられて救急外来を受診した。児は呼吸、心拍および対光反射がなく、蘇生を試みたが反応なく、死亡が確認された。頭部や顔面に新旧混在した皮下出血の散在と両足底に多数の円形の熱傷痕とを認める。母親によるとこれまで病気を指摘されたことはなかったという。死後に行った頭部 CT では、両側に硬膜下血腫を認める。

最も考えられるのはどれか。

- a 虐待
- b 髄膜炎
- c 先天性心疾患
- d 溶血性尿毒症症候群(HUS)
- e 乳幼児突然死症候群(SIDS)

41 10か月の乳児。お坐りができないことを心配した母親に連れられて来院した。

4か月時に受けた健康診査では異常を指摘されなかった。

この児の神経学的評価に適しているのはどれか。

- a 背反射
- b Moro 反射
- c Landau 反射
- d 手掌把握反射
- e 非対称性緊張性頸反射

42 45歳の女性。関節痛の増悪を主訴に来院した。5年前に両手指関節、両手関節および両肘関節の痛みが出現した。関節リウマチと診断され、サラゾスルファピリジン、非ステロイド性抗炎症薬および少量の副腎皮質ステロイドが処方された。2年前から関節痛が強くなったため、メトトレキサートの投与が開始され痛みは軽減したが、3か月前から増悪し、メトトレキサートが増量されたが効果は不十分で、日常の動作も困難となったため受診した。心音と呼吸音とに異常を認めない。両側の示指、中指、環指の中手指節関節〈MP 関節〉と両手関節および両肘関節の腫脹と圧痛とを認める。血液所見：赤血球 420 万、Hb 12.9 g/dL、Ht 39%、白血球 7,200。血液生化学所見：AST 16 U/L、ALT 20 U/L、尿素窒素 12 mg/dL、クレアチニン 0.5 mg/dL。免疫血清学所見：CRP 2.8 mg/dL、リウマトイド因子〈RF〉122 IU/mL (基準 20 未満)、抗 CCP 抗体 86 U/mL (基準 4.5 未満)。HBs 抗原、HBs 抗体、HBc 抗体、HCV 抗体および結核菌特異的全血インターフェロン γ 遊離測定法〈IGRA〉は陰性である。

次に投与する薬剤として適切なのはどれか。

- a アスピリン
- b コルヒチン
- c 抗 TNF- α 抗体製剤
- d シクロホスファミド
- e 免疫グロブリン製剤

43 27歳の男性。1か月前に乾性咳嗽と呼吸困難が出現し、軽快しないため受診した。4年前から液晶パネル製造工場に勤務している。胸部エックス線写真で両肺野にすりガラス陰影を認める。胸腔鏡下肺生検で直径1 μ m前後の微細粒子を認める。

この患者が曝露した物質として考えられるのはどれか。

- a 鉛
- b ヒ素
- c 水銀
- d クロム
- e インジウム

44 67歳の男性。3週間前に脊髄梗塞を発症し、下肢対麻痺を呈している。殿部に皮膚潰瘍を合併し、治療に難渋している。殿部の写真(別冊No. 9)を別に示す。

この病変に関係するのはどれか。

- a 坐骨
- b 仙骨
- c 尾骨
- d 腸骨
- e 大腿骨

別冊

No. 9

45 72歳の男性。脳梗塞で入院し、急性期治療を終え、現在は回復期病棟でリハビリテーションを行っている。右半身麻痺と嚥下障害が残存しているが、病状が安定してきたので退院を見据えて療養環境を調整することになった。

多職種連携における職種と役割の組合せで誤っているのはどれか。

- a 看護師 ————— 吸痰処置の指導
- b 薬剤師 ————— 服薬の指導
- c 理学療法士 ————— 関節拘縮の予防
- d 管理栄養士 ————— 食事の指導
- e ケアマネジャー ————— 介護度の認定

46 日齢0の新生児。在胎35週1日で早期破水があり、同日に経膈分娩で出生した。出生時は身長44 cm、体重1,960 g、頭囲30.0 cmで、心拍数は120/分であった。自発呼吸が微弱で全身にチアノーゼを認めたため、酸素投与を開始した。啼泣時に強直してチアノーゼとSpO₂の低下とを認める。両側の多指症および多趾症と両側停留精巣とを認める。合併する腹壁異常の写真(別冊No. 10)を別に示す。

基礎疾患を診断するために行うべき検査はどれか。

- a 頭部CT
- b 腹部CT
- c 染色体検査
- d 臍帯病理組織学的検査
- e 全身骨エックス線撮影

別 冊

No. 10

47 31歳の男性。頭重感、倦怠感および悪心を主訴に来院した。大企業の事務職をしている。半年前の職場の改修工事の際に刺激臭を感じ、その後、頭重感、倦怠感および悪心が出現するようになった。職場を離れると症状は消失し、休日は症状が出現しない。既往歴に特記すべきことはない。意識は清明。身長165 cm、体重61 kg。体温36.2℃。脈拍72/分、整。血圧112/78 mmHg。身体所見に異常を認めない。1か月前に行われた職場の健康診断とストレスチェックとで問題を指摘されていない。

まず行うべきなのはどれか。

- a 頭部CTを行う。
- b 甲状腺機能検査を行う。
- c 精神科受診を指示する。
- d 産業医との面談を勧める。
- e 市町村保健センターを紹介する。

48 65歳の男性。スクーターで走行中に対向車と正面衝突して受傷したため救急車で搬入された。腹部から腰部の痛みを訴えている。意識はほぼ清明。体温35.8℃。心拍数140/分、整。血圧80/50 mmHg。呼吸数24/分。SpO₂100%（リザーバー付マスク10 L/分 酸素投与下）。頸静脈の怒張を認めない。迅速簡易超音波検査〈FAST〉で異常所見を認めなかった。

ショックの原因として最も考えられるのはどれか。

- a 大量血胸
- b 緊張性気胸
- c 心タンポナーデ
- d 大量腹腔内出血
- e 大量後腹膜出血

49 中年の男性。道路で血を流して倒れているところを通行人に発見された。救急隊到着時には心肺停止状態で、病院に搬送されたが死亡が確認された。背部から出血があり、血液を拭き取ったところ確認された創の写真(別冊No. 11)を別に示す。

死亡を確認した医師が、まず行うべきなのはどれか。

- a 創を縫合する。
- b 警察署に届け出る。
- c 病理解剖を依頼する。
- d 死亡診断書を交付する。
- e 死体検案書を交付する。

別 冊

No. 11

50 40歳の初妊婦。妊娠6週の間診で、20歳から喫煙を開始し、現在も20本/日喫煙していることが分かった。

妊婦への説明として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 「早産の可能性が高くなります」
- b 「急に禁煙すると胎児に危険です」
- c 「胎児形態異常の頻度は2倍に上昇します」
- d 「妊娠12週になるまでは禁煙してください」
- e 「赤ちゃんの体重が小さくなりやすいと言われています」

次の文を読み、51～53の問いに答えよ。

73歳の女性。意識障害のためかかりつけ医から紹介されて家人とともに受診した。

現病歴 : 25年前にC型肝炎ウイルス感染を指摘された。6か月前に腹水貯留を指摘され、肝硬変と診断されてかかりつけ医で利尿薬を処方されていた。今朝から呼びかけに対する反応が鈍くなり徐々に傾眠状態になったため、かかりつけ医から紹介されて受診した。

既往歴 : 28歳の分娩時輸血歴あり。64歳時に食道静脈瘤に対し内視鏡的治療。

生活歴 : 喫煙歴と飲酒歴はない。

家族歴 : 特記すべきことはない。

現 症 : 傾眠状態だが呼びかけには開眼し、意思疎通は可能である。身長161 cm、体重59 kg。体温36.1℃。脈拍76/分、整。血圧104/80 mmHg。呼吸数20/分。SpO₂ 95 % (room air)。眼瞼結膜は軽度貧血様であり、眼球結膜に軽度黄染を認める。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は膨隆しているが、圧痛と反跳痛とを認めない。腸雑音に異常を認めない。肝・脾を触知しない。直腸指診で黒色便や鮮血の付着を認めない。両上肢に固定姿勢保持困難(asterixis)を認める。両下腿に浮腫を認める。

検査所見(3週間前のかかりつけ医受診時) : 血液所見:赤血球368万、Hb 11.8 g/dL、Ht 38 %、白血球3,800、血小板4.0万、PT-INR 1.3(基準0.9~1.1)。血液生化学所見:総蛋白6.5 g/dL、アルブミン3.1 g/dL、総ビリルビン1.8 mg/dL、AST 78 U/L、ALT 66 U/L、LD 277 U/L(基準176~353)、ALP 483 U/L(基準115~359)、 γ -GTP 132 U/L(基準8~50)、血糖98 mg/dL。

51 確認すべき症状として最も重要なのはどれか。

- a けいれん
- b 頭痛
- c 動悸
- d 腹痛
- e 便秘

検査所見(来院時) : 血液所見: 赤血球 356 万、Hb 9.7 g/dL、Ht 35 %、白血球 4,000、血小板 8.6 万、PT-INR 1.3(基準 0.9~1.1)。血液生化学所見: 総蛋白 6.4 g/dL、アルブミン 3.0 g/dL、総ビリルビン 6.3 mg/dL、直接ビリルビン 2.1 mg/dL、AST 78 U/L、ALT 62 U/L、LD 303 U/L(基準 176~353)、ALP 452 U/L(基準 115~359)、 γ -GTP 103 U/L(基準 8~50)、アミラーゼ 95 U/L(基準 37~160)、アンモニア 170 μ g/dL(基準 18~48)、尿素窒素 28 mg/dL、クレアチニン 0.8 mg/dL、尿酸 5.9 mg/dL、血糖 98 mg/dL、総コレステロール 106 mg/dL、トリグリセリド 90 mg/dL、Na 132 mEq/L、K 4.0 mEq/L、Cl 100 mEq/L、 α -フェトプロテイン〈AFP〉468 ng/mL(基準 20 以下)。CRP 1.0 mg/dL。腹部超音波像(別冊No. 12A)と腹部造影 CT(別冊No. 12B)とを別に示す。

別 冊 No. 12 A、B

52 次に行うべき検査はどれか。

- a FDG-PET
- b 腹腔動脈造影
- c 上部消化管内視鏡
- d 下部消化管内視鏡
- e 内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)

53 来院時の血液検査所見から現時点で肝腫瘍に対する治療適応はないと判断した。

その根拠として最も重要なのはどれか。

- a 血小板 8.6 万
- b PT-INR 1.3
- c アルブミン 3.0 g/dL
- d 総ビリルビン 6.3 mg/dL
- e α -フェトプロテイン〈AFP〉 468 ng/mL

次の文を読み、54～56の問いに答えよ。

84歳の女性。ふらつきがあり、頻回に転倒するため夫と来院した。

現病歴 : 2か月前に腰椎圧迫骨折を起こし、自宅近くの病院に入院した。入院後は腰痛のためベッド上で安静にしていた。徐々に痛みは改善し、1か月後、自宅に退院したが、退院後にふらつきを自覚し、転倒するようになった。ふらつきは特に朝方に強い。難聴と耳鳴りは自覚していない。入院した病院で頭部を含めた精査を受けたが原因が明らかでなく、症状が改善しないため受診した。

既往歴 : 68歳時から糖尿病と高血圧症、75歳時から逆流性食道炎と不眠症。

生活歴 : 夫と2人暮らし。喫煙歴と飲酒歴はない。入院までは夫と飲食業をしていた。リハビリテーションは週1回続けている。

家族歴 : 父親は胃癌で死亡。母親は肺炎で死亡。弟は糖尿病で治療中。

現症 : 意識は清明。身長150 cm、体重36 kg(2か月前は40 kg)。体温36.0℃。脈拍72/分、整。血圧146/78 mmHg(立位3分後138/74 mmHg)。呼吸数16/分。眼瞼結膜に貧血を認めない。頸静脈の怒張を認めない。心音と呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。下腿に浮腫を認めない。脳神経に異常を認めない。眼振を認めない。四肢に明らかな麻痺を認めない。筋強剛を認めない。握力14 kg(基準18以上)。指鼻試験陰性。Romberg徴候陰性。明らかな歩行障害を認めない。通常歩行速度0.7 m/秒(基準0.8以上)。手指振戦を認めない。振動覚と腱反射は正常である。

検査所見 : 尿所見：蛋白(－)、糖1＋、ケトン体(－)。血液所見：赤血球403万、Hb12.1 g/dL、Ht38%、白血球7,400。血液生化学所見：総蛋白6.8 g/dL、アルブミン3.3 g/dL、AST22 U/L、ALT14 U/L、LD278 U/L(基準176～353)、CK90 U/L(基準30～140)、尿素窒素21 mg/dL、クレアチニン0.7 mg/dL、血糖128 mg/dL、HbA1c7.4%(基準4.6～6.2)、総コレステロール186 mg/dL、トリグリセリド100 mg/dL、HDLコレステロール50 mg/dL、Na135 mEq/L、K4.2 mEq/L、Cl97 mEq/L。心電図に異常を認めない。高齢者総合機能評価(CGA)：基本的日常生活動作(Barthel指数)100点(100点満点)、手段的日常生活動作(IADLスケール)8点(8点満点)、Mini-Mental State Examination(MMSE)27点(30点満点)、Geriatric Depression Scale2点(基準5点以下)。

- 54 患者の状態として最も考えられるのはどれか。
- a ADL 低下
 - b 抑うつ状態
 - c 身体機能低下
 - d 認知機能低下
 - e 社会的支援不足
- 55 患者のふらつきと易転倒性の原因として最も考えられるのはどれか。
- a 貧血
 - b 廃用症候群
 - c 起立性低血圧
 - d 認知機能障害
 - e 糖尿病性神経障害
- 56 来院時の内服薬を調べたところ、経口血糖降下薬、降圧薬、ビスホスホネート製剤、ベンゾジアゼピン系睡眠薬、プロトンポンプ阻害薬が処方されていた。
- まず減量を検討すべきなのはどれか。
- a 経口血糖降下薬
 - b 降圧薬
 - c ビスホスホネート製剤
 - d ベンゾジアゼピン系睡眠薬
 - e プロトンポンプ阻害薬

次の文を読み、57～59の問いに答えよ。

63歳の女性。結腸癌のため開腹手術が予定されている。

現病歴 : 2か月前に受けた健診で貧血と便潜血反応陽性とを指摘された。2週間前の下部消化管内視鏡検査で上行結腸に腫瘤を認め、生検で大腸癌と診断された。胸腹部CTで転移を認めなかった。上行結腸切除術が予定されている。労作時の息切れや胸部圧迫感、動悸、腹痛、便秘、下痢および体重減少を認めない。

既往歴 : 45歳ごろから、高血圧症と糖尿病のため内服治療中。

生活歴 : 営業職で外回りをしている。ゴルフが趣味で現在も続けている。喫煙は20本/日を40年間。飲酒は機会飲酒。

家族歴 : 父親が心筋梗塞で死亡。母親が胃癌で死亡。

現症 : 意識は清明。身長155cm、体重62kg。体温36.2℃。脈拍84/分、整。血圧154/84mmHg。呼吸数18/分。SpO₂96%(room air)。眼瞼結膜は貧血様であり、眼球結膜に黄染を認めない。表在リンパ節を触知しない。頸静脈の怒張を認めない。頸部で血管雑音を聴取しない。胸骨右縁第2肋間にてⅢ/Ⅵの収縮期駆出性雑音を聴取する。呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。下腿に浮腫を認めない。神経学的所見に異常を認めない。

検査所見 : 尿所見：蛋白1+、糖(-)。血液所見：赤血球410万、Hb10.8g/dL、Ht34%、白血球6,400、血小板24万、PT-INR1.0(基準0.9~1.1)。血液生化学所見：総蛋白7.0g/dL、アルブミン4.0g/dL、総ビリルビン0.3mg/dL、AST26U/L、ALT32U/L、尿素窒素24mg/dL、クレアチニン1.0mg/dL、血糖116mg/dL、HbA1c6.6%(基準4.6~6.2)、総コレステロール204mg/dL、トリグリセリド180mg/dL、HDLコレステロール46mg/dL、Na138mEq/L、K4.4mEq/L、Cl102mEq/L。CRP0.3mg/dL。胸部エックス線写真と心電図とに異常を認めない。

57 術前検査として行うべきなのはどれか。2つ選べ。

- a 頭部 MRI
- b 心エコー検査
- c 呼吸機能検査
- d 運動負荷心電図
- e 75 g 経口グルコース負荷試験

58 手術室入室後、皮膚切開までの間に行うべきなのはどれか。2つ選べ。

- a 剃毛
- b 抗菌薬投与
- c タイムアウト
- d 肺動脈カテーテル挿入
- e インフォームド・コンセント取得

手術後の経過 : 手術は問題なく終了した。術後4日目早朝の体温は37.5℃であった。意識は清明。脈拍88/分、整。血圧124/70 mmHg。呼吸数20/分。SpO₂96%(room air)。呼吸音に異常を認めない。腹部に圧痛を認めない。手術創周囲に発赤と腫脹とを認めない。肋骨脊柱角に叩打痛を認めない。2時間後に再測定したところ、体温は37.0℃であった。術後4日目の朝の血液検査では、Hb9.4 g/dL、白血球6,800、CRP1.7 mg/dLであった。胸部エックス線写真で異常を認めない。

59 この時点での対応として適切なのはどれか。

- a カルバペネム系抗菌薬投与
- b 下部消化管内視鏡検査
- c 試験開腹手術
- d 全身CT
- e 経過観察

次の文を読み、60～62の問いに答えよ。

15歳の男子。通っている学習塾の講師が肺結核と診断されたため、保健所からの結核接触者検診の指示を受けて受診した。

現病歴 : 2週間前から微熱と咳嗽が続いている。痰が絡む咳嗽が1日中持続している。

既往歴 : 特記すべきことはない。

予防接種歴 : BCG接種歴あり。

家族歴 : 父と母との3人暮らし。家族内に他に咳嗽のある者はいない。

現症 : 意識は清明。身長166 cm、体重56 kg。体温37.6℃。脈拍72/分、整。血圧124/62 mmHg。呼吸数16/分。SpO₂ 98% (room air)。眼球結膜に黄染を認めない。咽頭に発赤を認めない。甲状腺と頸部リンパ節とを触知しない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。

検査所見 : 血液所見：赤血球472万、Hb 13.5 g/dL、Ht 39%、白血球7,400(①分葉核好中球56%、好酸球1%、リンパ球43%)、血小板24万。血液生化学所見：総蛋白7.6 g/dL、アルブミン3.8 g/dL、総ビリルビン0.6 mg/dL、AST 26 U/L、ALT 13 U/L、LD 228 U/L(基準176～353)、 γ -GTP 12 U/L(基準8～50)、尿素窒素11 mg/dL、クレアチニン0.3 mg/dL、血糖96 mg/dL、Na 140 mEq/L、K 4.1 mEq/L、Cl 102 mEq/L。CRP 0.8 mg/dL。②結核菌特異的全血インターフェロン γ 遊離測定法(IGRA)は陽性。③喀痰塗抹Ziehl-Neelsen染色でGaffky 3号。④喀痰結核菌PCR検査は陽性。胸部エックス線写真で異常を認めない。⑤胸部CTで右下肺野に小葉中心性の粒状影を認める。

60 この患者を結核感染症と確定診断するために最も有用な検査所見は下線のどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤

61 臨床経過と検査所見から肺結核と診断した。

保健所に肺結核の届出を行う際に、届出が必要な診断後の期間はどれか。

- a 直ちに
- b 7日以内
- c 14日以内
- d 21日以内
- e 28日以内

62 この患者に対する標準治療として使用しないのはどれか。

- a イソニアジド
- b ピラジナミド
- c エタンブトール
- d リファンピシン
- e レボフロキサシン

次の文を読み、63～65の問いに答えよ。

35歳の女性。左上下肢の脱力のため夫に連れられて来院した。

現病歴 : 3年前に複視を自覚したが、疲れ目と考え様子をみたところ、数日で自然軽快した。1年前に右眼のかすみを自覚して自宅近くの眼科診療所を受診したが、眼底検査に異常なく約2週間で軽快した。2日前に左下肢、引き続いて左上肢の脱力を自覚した。本日、歩行も困難になったため受診した。

既往歴 : 特記すべきことはない。

生活歴 : 事務職。会社員の夫と2人暮らしで子どもはいない。喫煙歴と飲酒歴はない。

家族歴 : 特記すべきことはない。

現症 : 意識は清明。身長156 cm、体重50 kg。体温36.5℃。脈拍64/分、整。血圧126/68 mmHg。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。視力は右0.4(0.8×-1.5 D)、左0.6(1.2×-1.0 D)。他の脳神経に異常を認めない。四肢筋力は、右側は正常、左側は徒手筋力テストで3～4の筋力低下を認める。腱反射は左上下肢で亢進し、左Babinski徴候が陽性である。自覚的に左半身のしびれ感を訴えるが、温痛覚、振動覚および関節位置覚は左右差を認めない。

検査所見 : 尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球468万、Hb 13.9 g/dL、Ht 42%、白血球5,300、血小板21万、PT-INR 1.0(基準0.9～1.1)、APTT 31.4秒(基準対照32.2)。血液生化学所見：総蛋白7.5 g/dL、アルブミン3.9 g/dL、IgG 1,424 mg/dL(基準960～1,960)、総ビリルビン0.9 mg/dL、直接ビリルビン0.2 mg/dL、AST 28 U/L、ALT 16 U/L、LD 177 U/L(基準176～353)、ALP 233 U/L(基準115～359)、 γ -GTP 32 U/L(基準8～50)、CK 72 U/L(基準30～140)、尿素窒素12 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、血糖98 mg/dL、Na 140 mEq/L、K 4.4 mEq/L、Cl 97 mEq/L。免疫血清学所見：CRP 0.3 mg/dL。抗核抗体、抗DNA抗体、抗カルジオリピン抗体、抗アクアポリン4抗体およびMPO-ANCAは陰性。脳脊髄液所見：初圧80 mmH₂O(基準70～170)、細胞数1/mm³(基準0～2)、蛋白60 mg/dL(基準15～45)、糖60 mg/dL(基準50～75)。頭部MRIのFLAIR像(別冊No. 13)を別に示す。

63 診断に有用な検査はどれか。

- a 脳 波
- b 視覚誘発電位
- c 脳血流 SPECT
- d 頸動脈超音波検査
- e 反復誘発筋電図検査

64 まず行うべき治療はどれか。

- a 血栓溶解療法
- b 血漿交換療法
- c 免疫抑制薬投与
- d ステロイドパルス療法
- e 免疫グロブリン大量静注療法

65 治療は奏効し、症状は軽快した。

再発予防に用いるのはどれか。

- a アスピリン
- b ワルファリン
- c シクロスポリン
- d インターフェロン β
- e 副腎皮質ステロイド

66 ある患者の動脈血ガス分析(room air)のデータを示す。

pH 7.40、PaCO₂ 36 Torr、PaO₂ 79 Torr。

肺胞気-動脈血酸素分圧較差(A-aDO₂)を求めよ。

ただし、小数点以下の数値が得られた場合には、小数第1位を四捨五入すること。

解答： Torr

- | | |
|---|---|
| ① | ② |
| 0 | 0 |
| 1 | 1 |
| 2 | 2 |
| 3 | 3 |
| 4 | 4 |
| 5 | 5 |
| 6 | 6 |
| 7 | 7 |
| 8 | 8 |
| 9 | 9 |

